

和田節定編輯
開明小說

春雨文庫

第六號

下

35

30

25

20

A 448
12

010190508310

48-7544

春雨文庫第六編卷之下

東京 和田定節著

○第二十三回

花はなの爛らん慢まんたるも見み様よう不ふ因いんてハ無む常じょうの感かんと發はつ
 月つきの麗れい朗らうとるも心こころふ愁うれへあろとさハ哀あはれと誘さそ
 ふ媒まへ妁ごちとやるらんお梅うめハ吉きち太た郎らうよりの便べんり哉や
 得えず嬉うれしさ限かぎり無なく使つかひの者ものと饗め食じ應えい一いつ京きやう都との
 容やう子すと詳くわしく聞きんと為せしハ今こん夜や中ちゆうハ是ぜ非ひとも

江戸へ往ねば成らぬとて尻杖落着ぬ由酒代と
與えて是と歸せし後いそぎりの包とと奥の小
座敷へ持ちき燈火の下に油紙と解不びし先書状
を開きく見るに世の中へ何となく騷々しけれど
も日々潔よく勤て居り同役の人々おひく家内と
引纏めをむ折と見合せ呼迎へ下るとの事が細
々書てあり且西陣ふて云々の品と求めたをを送
るとの相も愛らぬ艶しき身不染渡る嬉しき
と包むに餘る帯地髪かけ縹絆の袖口半襟ふ時
分とぬ春の花秋の紅葉と宛然に敷散したる如
くなり然とむお梅の色の美しきと打る
がめまると吉太郎の厚き意と思ひ夢心地ふく有
りけるが不斗氣がはき帯地の切とて採りて
溜息をるがごとく紺地の本國おりに蘭の模様と織
出しと誰に見せても寸対の無品なれど世の中
が騷々しいの下京都へ護衛ふお出の吉太郎さん

のち身ふ取と本國おりの蘭の模様が本國の亂と
變り再び江戸や横濱へいこん地と言ふ辻占う
と思察る心ふ案トて見ると繻絆の袖口や髪か
けの切の鍔砲絞りキシヤゴ絞りも互ひふ撃あふ
鍔砲あがり槍と接ゆる騎者伍あがりふ成へ仕
舞うときふ掛り又去の半衿の浅黄地ふ朝顔と
秋の蝶の縫とり模様朝がふの敢果あるをの
限り又比へ秋の蝶の翌日をも知れぬト言かけホロ
リと泪を翻しつ差し伏むいて居るうしが思ひ忘
れ様としく表と詠めねて居て待つ果報より増
て嬉しい京都の便りふ此種々と戴いと勿体ある
とも有がらいと申す禮の申し様ある程なれど
今日の嬉しいお送り物が後の悲しい辻占の知らせ
不成りの為まいらと思ふと此かて紙ふ書て被遣
の通り一刻も早く迎ひのお下りふなり御一所
ふ京都で暮したら仮令その地ふ戦争が始ま

り兵糧のお握飯や草鞋の紐のお世話と一若
一萬一の事がある此身も共死で仕舞女の
道へ立るなれど何と言ふも懸隔つて居るむり
りで無く未ど表向き親と親と不許されと夫婦
で無から誰やらの歌ふ羨やま一人目なき野のき
りぐに鳴も心の儘あゝぬ身へと有通り嬉しい事
が有ればあるで悲しい思ひのまゝて来る鳴虫と
やらふ取り附きでも為とのうと彼を思ひ是を
案ど涙ぬ濡る袖を噛と獨り愁然たりける折
から廊下ふ破多々足音してアお梅さんへ
先刻から何處へ隠れん坊としく仕舞とのうと
思つとら此處ふ閉籠りまゝと京都の事と考え
塞ぎの虫てお出るさううと言ひるぐる入り口の
障子を明るお松の姿お梅の早く書状と隠し
アオヤお松さんお忙がいふも構はず此様るとこ
ろふ逃込んぐ居てお氣の毒さう然がア一寸御



お梅吉太郎
よりの贈物
分配す

覧らんるささの京きやう都との漆しの綺き纏ちんななことこと一一ホホニニママアア美うつくしい
 絞しぼりりでで有ありりますす移うつりり然しかししここ此こ帯おびの宜よろししきき是これれがが真ま正まの
 澁しぶいいとと言いふふののどどのの夫おとこふふままアア半はん襟えりの意い気きるる事こと定さだめ
 彼かれのの人ひとかかららででせせううがが美うつくまましいしいぢぢややアア有ありりまませせんんら
 何なに様さまままりりややアア渡わた邊へんさんさんのの此こ様さまふふ實じつがが有ありりてて優やさしい
 どどららううトトおお梅うめのの顔かほとと見み詰つめてて居ゐるるおお梅うめのの泣な顔がほととお
 松まつふふ見みせせドドとと明ありりなな斜しやみみ身みととそそむむけけ「「アアレレ否いなど
 よよノノ珍めづららししくくもも無む顔がほととササ「「夫おとこでもも渡わた邊へんさんさんがが何なに
 處このの愛あ敬けいふふ惚おぼととううとと思おもつつててササ「「又またおおいいぢぢめめどど「「夫それ
 ぞぞガガ子こ矢や張ちやう去きのの品しやうのの渡わた邊へんさんさんかかららおお遣よこすすののどど
 帯おびののおお宅うちへへ届とどけけてて上あるるののどどガガ半はん掛かけやや袖そで口ぐちののおお松まつさ
 んさんややおお竹たけさんさんふふもも上ありりてて吳くれろろとと言いつつてて被お遣よこすすののどどかから
 中なかかよよくく分わかかてて戴かぶききまませせうう移うつりりトト聞きききおお松まつのの亮あき示しすす
 顔かほ「「おお梅うめさんさん真ま正まふふささううママ嬉うれしいしいねねへへトト鼠ねず鳴なまま
 けけ折しやうりりここ小こ用よう所しよへへ往ありり参まゐりり客きやくがが廊らう下かとと通とほりりななががら
 上うままくく遣よこすすややアアががるるぜぜ畜ちく生せいめめ

○東福寺の鐘かねの丑刻うしごけを打切り四邊あちうやうやく寂せき
漢またる時とき入り口くちのとを瓜うりの先さきりて竊ひそりふとくと
押おけば内うちより「唯ただと言いつ立出たいで掛鎖かざ外そとへと戸とを
細こめふ明あけけ「且かつ那なでこざい弁べんとこ小こ声こゑで言いはへ「應う
自おの己れどのの答こたへも竊ひそりに其方そち此方こち見みまへ内うちへ這こ
入いりて戸と締とり做し上りるがう今日けふの餘あまり遅くる
りし而の已もらず世よの中ちうも煽動せんどうの火ひのてが強つよいの
で段々だんだん沸騰ふいもつて来きとから来こめへと思おもつとか其事そのこと
を心得こころえさせて置おてへので一寸ちゆうとん抜ぬて来きとのど酒さけ有ある
「万まん一いつお往いりて有ありと存ぞんトお支度しどと為なして置おまし
とから直ただふお爛らんを附つませう「开ひてやア有あがて然さら
お鍋なべへ眠ねり込こんどあるる寐ねとまふして置おが宜いとふ
へ召使めいしひの下女げぢよのとるるべし又また此處こゝふ来きりしの新撰せん
組ぐみの頭かみ近藤こんどう勇ゆうみと此所こゝのおの妻つまお美弥みやの隠かく
れ家かるるお美弥みやの勇ゆうの来きる夜よも来こぬ夜よも酒さけの
支度しどと為なし下女げぢよへ先さきへ寐ねさせ其身そのみへ寅刺やまつむら迄まで

臥床ふしどふいらず待まちて居ゐれを直ちふ酒さけの爛えをここち些ちと
の者さまを添そへ出いけり由よし免い勇きの數す盃まいを傾かけるがら下した
酒さけの百ひやく葉やくの長ちとへ斯さの時ときふ飲のみの致いた言ことのとら
う漸そこまそう片かたが開ひいて来きと去さ来あ前まへも一いつ盃まいのま
袂たもとへう美み戴かぶきませうう袂たもとへ然ごとが前まへの一つで大おほ造さう醉よひ
まま一いつ醉よひとああひどが極ごく樂らくと世よの中なかのさららぬど
不あ飛あ鳥すう川がわの淵おち瀬せの變かり易やすきふ譬たとへて有あるとま
してしてやりふ日ひの景あ況さまへ真ま事ことふ七なな色いろ蕃ばん菽しやくで辛からい

と思おもへば甘あまく成なるその時とき々の匙さし加く減げんふへ困こまりき
る夫それを思おもふと飲のみべーサ此こん度どへの大おほきいの次ついでで
貫ぬへう一いつ美みアあ小ちひさい方かたふーくな置お置きるさいますーヨ
ヲと酌しやくを為なるがらら美みアあノノヲ今日けふの何なんどうか上うが誤ご多た
はくでへ有ありませんう一いつ其その事ことヨ是これまで長ち州しゅう藩はんが大
さうふ威いと振ふるつて居ゐとところが今日けふ急きんふ毛け利り讚さん
岐き守しゅ吉きち川がわ監かん物ぶつ益ます田でん衛ゑい門もんの三さん將しやうみて入い數すうとひきい
固こめて居ゐと堺さかい町まち御ご門もんの守しゅ護ごと免めんぜられとのふ

此件文久三年八月十八日の事なり

彼の藩士らが大いなる是と激怒るの事ならず七卿

も又怒るとまひ

此時七卿と称せし三條黄門實美卿(今の太

政大臣)三條西中納言季知卿東久世少将通禧

卿四條侍從隆訶卿壬生修理大夫基修卿錦小

路右馬頭頼徳卿澤主水正宜喜なり

忍びくみ長州の藩士らに隊中へ加えり給ひ

容子るれ在堺町御門へ會津桑名とうの藩士交

代して是と護衛し我新撰組る者の者も事あら

在其應援を做んと各戦ひの準備として待かけ

今も事起らんとまろ有様るを此後不至

りて一隊中我離れられぬ故土方と頼と

徐と抜くきとい若し事あつて此地に合戦の術

巻とるり砲声急ふ鎮まらぬ或ひに放火をぞ

の爲に此住居を焼れり豫て話して置

たる通り粟田口の裏山とへて近江へいで石山の
観音を目あてふ聞往きりの隠れ家ふ容子を窺
ひ居り我討死せしとふ評あらしを速やうふ大藏
村へあり江戸へあり下るべし然と合戦ふり甚ど
浮説の多きもの故人の話し我迂濶不信仰へる
しがと其もなへ僕が今下らるく死で仕舞と
折角の思ひで女房ありと人と表向の廣めもせ
ず置く往て仕舞るければ成らるのうと云々

お美弥の顔を見れお美弥もまた勇の顔と表
つと見詰て居とりしが愁然として溜息つき「イヤエ
若し合戦が始まつて貴君が討死でもなさる
様な事が有ると吾儕へ江戸へは参りません」
「何處へゆく」お後から追附眞土とやらのお
供と致しますから何卒連て往て下さいます
「イヤ詰ら秘事我言ふ折角の酒がり不落ちて
旨くるし先々左様なご時の相場ふ任せて置

として最一盃次ぐ貫たう一夫でも貴君が若討
 死をうらむんのと哀しい事と被仰から廿一貫ふ
 く左様夫でい去来合戦と聞えう巴御前や班額
 女の様ふ敵軍へ討て入り新撰組ふの女將軍あ
 りと人の恐まるやうふして貫ひといが夫でい何
 様ぞ一あんふ世間の人が大藏村で劍術と遣つ
 と二子の重六の様ふ弱いと直ふ出て苛い目ふ
 遇してやりまねが祿工併貴君が連て出てさへ
 下さりやア掛替の砲や兵糧ぐらゐん擔いで往まねワ
 悔しい祿工何卒ふ供を為せて下さいまう。エ随分働
 きますから廿一ヤ待巴御前や班額女の様ふ働い
 て貫ふの宜が和田義盛や浅利與市ふ生捕れ向
 んの者ふ為れちやア種すりごから鉄砲擔ぎも兵
 糧持も止して矢張自己とむくり合戦と一置
 とと極て仕舞廿一オホく左様まると負續けて勝
 こといかりも出来ません祿工一左様下も祿人の家

近藤勇
子の
妻の
隠れ
家
来



の詰り智恵の有るをうが上ふ立から仕舞ふの
自巳のむうが組伏られ尻ふ敷れて仕舞ふごらう
コレはア憎らしい何時吾侪が尻ふ敷まうとエと勃ふ
あり勇の膝へ膝はき附て摺よれを勇へ猪口を
持とる手と除一是サ浮山氣るる串戯と為ると酒
が翻るるワ一夫でも他の事と違ひ腹が立下り有
ませんうとらうせ笑ひ顔とあらう側へ来る氣遣ひ
ハ無いうら怒らして斯様ハ風ふ摺り寄せろの

謀計どアと口の内ふ下唄ふ都々一用が有とて呼ど
ハ嘘よお顔見とさの計り事ッ一めんふ否る新撰組
のお頭さまどお人品ふ似あへるの意氣な声と出
たり女を焦すのがお上手ごうらう色男のお頭さな
おお役がへと成さいま一お前が惚てさ人呉れを
何役おでも直お成のサ一此うへ最と惚とるう氣
グ狂ッて仕舞升ごらう糸エと真面目ふるり勇の
顔とて居れば勇ハ莞示一篋ごらうめエ

○第廿四回

四條南の大芝居この江戸大坂から登り役
者一の顔揃ひとく近来稀るる當りと為一日毎
小運ぶ人の足人の山るす大入へイ得都會の花
まりけり爰ふ小常の一ト群へ田原屋清兵衛が
長門へ下る心の暇乞の留別ありとい知らず一
時の奢りと思ふ也及今日は晴着の伊達衣裳
髪の飾りも花美やうふ粧ひとく朝まどきあり

出りけ来り一芝居茶屋江戸屋の二階此家へ兼
て田原屋の恃とはけるれを只さへ扱ひの鄭重な
ると清兵衛不託さと此日の事引請居をを
終屋寅吉がをうらひふく土産纏頭も行届くふ
亭主へ元より下婢料理場送り迎ひの若い者ら
が世辞輕薄のて厚さの黄金の利益と知られ
たり若者一今日は宜うお出ますと何やら世間の
混雜をる一でなましげるア仕合るとふい今度も

まゝ大景氣おんけいきに棧敷土間さたきどまへ猶なほさう簾引船すしひきぶねまでも
毛氈けいせんのわくる程ほども定まこと骨ほねが折おれまゝとれど外あつさ
まちがと違ちがひ御具ごぐ負お厚あつい横田よこたさ々の事こともれを稍やう
く上等じょうとうの場ばと取とりまゝと只今ただいま御案内ごあんないいた
まいへト言いふうち出い出す茶草煙盆ちやそうえんぼん小常せいちやうへ常じやう香かう
づると帶おびると人ひとかへ支度しどと居ゐる程ほどもなく
迎むかひふ来きる茶屋ちややの男おとこふ連つれられく各棧敷おのづか
へ到いたりけり此この時とき寅吉とらきちの用よう不ふ仮托かりたくあといふ残のこり

が小常せいちやうらぐ忙いそ々いそと足元あしもと世話せわしく芝居しばいの木戸きどと這は
入いり往ゆく後影ごうかげ見みおくりて一人ひとり何なにやら點頭ちんとうツ寸買すんかひ
りのを為なて来きるとして茶屋ちややと出いでいが急いそぎ此裏町このうらまちふ
住すむ目明めあつ一いっ玄藏げんざうの家うちへ到いたり門かど口ぐちあけて首くびさへ入い
れ一いっ親方おやうのお内うちの子こと言いはは玄藏げんざうへ火鉢ひばちのそむすむ居す
つゝおて一いっ寅とらさんさんう上あんんるせへ一いっ自おの己のア留る守すうと
思おもつて案事あんじて来きとが占うらんとい言いひひるらう上あり込こ
と一いっ此この二に三さん日にちへ猶なほ々々騒さわ々々いといのの評判ひやうはんどのの不ふ能よく

居みとるアま今いままでハ西風かぜが強いので自己おのれちも尻しつ
尾おと巻まき成なりり丈とけ其鼻息そのなまいきは除よみく居おとが此程このほど
小到せうたうり攘夷じやういどの鎖港さこうどのと言いふとハ當時とうじの世せ
界かいの景況けいけいでハ迎むかへ出来できぬ譯わけが関白せんぱくさ々ささと始はじめ
諸卿しよけい方かたへ知しれとので又東風とうふうハ吹ふかへーさーも今いま
まで勢いきほひと張ちて居おと長州ちやうしゅうの三大将さんちやうじやう毛利もうり讃岐守さぬきのうゑ
をとりおぼのての者もの一同いどうが堺町御門さかいまちごもんのお固かめと
上あげられると三條さんじやうさ々ささ其餘そのよの六卿ろくけいが此人數このおんずと一ひと

ウふ成なりりての大怒おほいり夫それハ附つちやア勤王きんわうと名なと一ひと
て世よの中ちゆうに験げんがすつと共ともを盡つくく縛くわめ捕とく仕し
舞まいの守護職しゆごしやく會津侯あいづこうや所司代しよしよだい桑名侯さうなこうの御下おかげ
知ちふより自己おのれとちのお頭うらとを町奉行まちぶぎやうハ元もとより
見廻みまわり組ぐみでも新撰組しんせんぐみでもてみてと盡つくす最中さいちゆうど
から今朝けさらア安閑あんかんとして内うちハヤ居おられ後ごへのど
がお前まへから言い込こんだ話わの奴やつこさんがいよく出掛でかけく
来きとろ何様なんざうで有あらうと思おもひ待まちて居おとのどア左ひだり

様であつて開りやア氣の毒るありー小常の連
中のかねて話して通り自己が今日の総奉行ど
から誘ひ出して首尾よく芝居へ嵌こんで来と
が肝心の横印へ自分のむれの火のてが弱く成
とのふ恐いのり何程煽動かけ勸めく見ても中
く出かける景色るく事ふ因と自己が往ても隠
れて遇ぬとが有から何でも一目論見あらうり
知れぬへと察しともぬ一寸その訳と尚話し相

引出す工夫ふ仕組うからお前へ早く茶屋へか
へり小常の番を為く居祓へ午刻過ぎまでふや
必ず方と附ると聞き寅吉へ打點頭一夫ぢやア旨
く遣て見て呉んぬへ今日の様る首尾へまこと
再とび無のどかろサ一玄ずと承知の介どから摸
様の附と待て居るせへ一夫あろ玄さんドレ番人
と為く居やううト尻引かろげく帰り往バ玄藏
へ後見おくり一ホニ老と野郎ぢやア祓入りいくら

彼奴が横田の女房のな岩とやらふ惚て居る横
田を此方人らふ拵揚げさせとつて誰があんる奴
の言を我聞のう然ハ笑ふもの寅吉のやうな
南畠野郎があれバこそ此方人らの錢儲のては
きも附と言ふものドレ一走り往て來やうと言ひ
り續いて出うけたり

○却説芝居ハあひくハ幕移るハど人込て小常
ハ逆上ハ耐られぬハ暫時その炎熱と醒さんと

幕の間を抜てき江戶屋の二階の奥の間の椽
のて摺り身とよせうけ風ハ吹れぬが清兵衛
が容子の此不ど別て常らぬと何様と事
と考えの思案ハ沈と居る折から階子の段
と踏らら上り來る寅吉ふと夫ハ引添ふ二
りの武士小常の座敷へ入り來る寅吉ハ武士ハ
會釋一ハ小常ハむくハ一ハ且那がとハ清兵
衛さんと豫く御具負ふるさる方々みてお前

所弘賣

色自他と極のどくさう二早う用ひるが何指ふ荒花の肌目も
 羽二重のつらたを渡るとさうのさうは。ゆたひ。そはさ。控
 の先。もそのおちしゆさく清くさうりくさうと清合。物死て船を
 僕このまね事然さうのさうのさう白粉と付る指さるるもさう
 自他素良のゆくらうらうに指さるるの指さるる及事清くさう
 利のひても目にさびくとさうる紫法ゆさう軽ひうゆ利ひさう
 眞の義人とさうりゆさう

初みゆら

書物并繪入讀本所

江戸京橋左門町東側中程
 大島屋傳右衛門

開明 小説 春雨文庫

第四編より 近世の烈婦孝女乃傳説を
 引續き出版 記し面白き珍書あり

松村春輔編輯 復古夢物語

初編より 八編まで 出版

這ハ明治太平記の前篇より、壽永
 六年、米利が使節相州浦賀へ來船
 以來、明治元年、伏見戦争迄、委し
 たる面白き書也

和田定節編輯 參考鹿兒島新誌

半紙本 初篇より七篇 迄全部十五冊

此書西国征討の始末を詳細に
 述べる第一の實録あり

東京書肆

大島屋

武田傳右衛門

弥左エ門町上ニ番地

